

Emily Dickinson と東洋思想

鶴野 ひろ子

初めに

Emily Dickinson は 1846 年 9 月、ボストンで Chinese Museum を見学した。15 歳の娘であれば豪華な展示物に目を奪われても不思議はないが、彼女は展示を解説していた中国人の元阿片患者が語った、阿片中毒を克服するための“self denial”に興味を引かれたと手紙に書いている(L-13)。そこで Chinese Museum がどのようなものであったか、またその体験が彼女の詩にどのように表れているかを論文発表したところ、中国人の研究者が次々と、ディキンソンの詩の中に仏教、道教、あるいは儒教に通じている詩があると言う論文を発表した。しかし、いつ、どのようにして彼女が東洋の思想・宗教に触れたかという事実関係については、Chinese Museum と、そこで見学者に配布された解説書以外、分かっていない。ただ、田中泰賢が彼女の文通相手であった Thomas Wentworth Higginson が 1870 年代に発表した仏教に関する論考が彼女に影響を与えたのではないかと論じている。一方、著者は彼女の仏教的なものの考え方はもっと早い時期から形成されたと考え、Chinese Museum を見学した時、既に中国の歴史や思想・文化の知識があったからこそ、“self denial”という精神的なものに興味をいだいたのではないかと異教についての知識があったからこそ、1840 年代、1850 年代のアマストにおける宗教復興の中でも宗教告白をしないという強い意志を通せたのではないかと彼女の後の隠遁という生き方も、他にも原因はあったようであるが、仏教の影響もあったのではないかと推測する。今回は、彼女が十代の頃に東洋の思想に触れた経緯を探ってみた。

I. Salisbury と Peabody

Thomas A. Tweed によれば、米国には 19 世紀初めから旅行者や宣教師、外交官達から様々な「異教の」宗教についての断片的な報告がもたらされてはいたものの、保守的なキリスト教信者には興味を抱かせないままで、1880 年代によく仏教に対抗してのキリスト教擁護や仏教への好奇心といった反応が現れてきたと、これまで理解されてきた。しかし彼は、1830 年代、1840 年代のヨーロッパでの仏教研究やニューイングランドの超絶主義者によって 1844 年頃から「仏陀」が知られるようになり、1850 年代にはイエスや、モハメッド、孔子等と共に、仏陀が宗教の開祖として話題にのぼるようになったと言う。具体的には、1844 年に Edward Elbridge Salisbury がフランスの Eugène Burnouf の仏教研究についての講演をしたことと、同年、Elizabeth Palmer Peabody が Burnouf の法華経の仏語訳の一部を英語に翻訳し、解説を付けて、*The Dial* に“The Preaching of Buddha”として発表したことが米国における仏教についての会話の始まりだと言う。しかし Peabody が仏典の翻訳をしたのは、それまでに仏教の知識があったからではないかと著者は考える。

II. *The Missionary Herald* と *the Chinese Repository*

米国には、仏教についての情報が 1820 年代から中国に居たキリスト教宣教師によって伝えられていた。米国のプロテスタントキリスト教宣教師団体が 1806 年からボストンで発行してきた機関誌 *The Missionary Herald* (MH) を見ると、1820 年代、London Missionary Society から派遣され広東にいた Robert Morrison からの手紙が頻りに掲載され、米国からも宣教師を広東に派遣するという要請と共に、中国についての情報が記されていた。中国への宣教師派遣の要望は Morrison だけでなく、広東においてしか貿易を許されていなかった米国の貿易業者によっても叫ばれていた。その結果、1830 年 1 月の MH には、「Dr. Morrison と広東貿易に従事している米国の貿易業者、両者の要望によって」遂にボストンに拠点を持つ海外宣教師派遣団体 the American Board of Commissioners for Foreign Missions から「Rev. Elijah C. Bridgman が宣教師として広東に赴くべく、ニューヨークを出立した」と書かれている。1833 年には、広東で *The Chinese Repository* (CR) が発行されたこと、また Samuel Wells Williams が印刷者として広東に派遣されたことが報告されている。彼は後にペリーの日本遠征で通訳を務めたが、彼こそが CR を通じて中国についてのあらゆる情報を米国に送り続けた。1839 年 5 月から 1840 年 4 月の一年間だけでも阿片関係の記事が 30 項目、1841 年から 42 年にかけての一年では 18 項目もあり、Dickinson が元阿片患者と話をした時、阿片中毒についてではなく、阿片中毒を克服するための“self denial”に興味を持ったのは、既に阿片中毒について知っていたからだと思われるが、これらの記事を読んでいたからかもしれない。

III. 宣教師、貿易業者、そして政治家

CR は宣教師や、貿易業者だけでなく、当時の米国の政治家にも必要な情報源であった。阿片戦争直後の 1843 年 5 月には、Caleb Cushing が Tyler 大統領から特命全権公使の命を受けて、中国との貿易協定を結ぶためマカオにやってくるが、広東からマカオに移っていた Williams が彼の助手として活躍したのは当然のことと思われる。しかも 1845 年の CR には 1844 年の米中の協定締結の過程や、Bridgman が英訳した中国側と取り交わした書類、

Cushing の詳細な報告等が掲載されている。さらには、1843 年 5 月にワシントンから発信された、当時の国務長官 Daniel Webster から Cushing への詳細な指示も掲載されている。このように、Williams の活動は当時の貿易業者だけでなく、外交政治とも深く結びついていた。言い換えれば、宣教団体、貿易業者、政治家、それら三者が互いを必要とし、協力し合っていたのである。Webster は 1849 年から American Board の名誉会員であり、Edward Dickinson も 1852 年から会員、1858 年からは Emily を含めた Dickinson 家全員が名誉会員となっており、Edward Dickinson は弁護士で、Webster や Cushing 同様、ホイッグ党の党员で、Massachusetts 州議会議員、知事諮問委員会委員、さらには国会議員も務めた政治家であり、Webster 等と関係があった。また、詩人の母方の Norcross 家にはボストンの貿易業者が何人も居た。それ故、Emily Dickinson は、東洋進出を望む宣教師、貿易業者、政治家という三者の共同体の正にその真っただ中で、十代を過ごしたことがわかる。

IV. Chinese Museum と Dickinson の家族

米中の貿易協定後、中国が野蛮な国ではないことを示すため、中国の商人とアメリカ人宣教師が協力して豪華な中国製品を集めて Chinese Museum を開催したと言われているが、その宣教師こそ Williams だと思われる。彼はその後、印刷のための漢字のフォント等を手に入れるため、またその資金を集めるため、米国に一時帰国し、1845 年から 46 年にかけてニューヨーク州からニューイングランド地方の様々な場所で、100 回以上、中国についての講演を行い、出版もしている。同時期に開催されていた Chinese Museum と相まって、大勢の人々に中国文化を印象付けたはずである。それ故、Tweed の指摘する Salisbury の講演と Peabody の法華経の翻訳だけでなく、Chinese Museum と Williams の講演等も米国における仏教への関心に貢献したと言える。

これまで Dickinson が当時、ボストンの親類宅に滞在していた理由は、彼女の健康が優れず意気消沈していたので、気分転換のためとされてきたが、その頃、友人への手紙の中で、アマストにおける宗教復興の中で宗教告白できないという悩みと体調不良に何度も触れている。それ故、宗教についての精神的なストレスから体調を崩し、鬱状態になったと思われる。彼女が滞在した母方の親戚 Norcross 家の人々は先進的な考え方で、彼女の祖父 Joel Norcross は 1804 年に Monson Academy を創設し、娘の Emily Norcross はそこで当時最新の科学教育を受けていた。Martha Ackmann は、多くの人々が女子に教育は不要だ、女性の生殖能力に害があると考えていた時代に、娘にそのような学校で学ばせていることから、彼らは nonconformists だと評している。一方、Dickinson 家は宣教師養成のためアマスト大学の設立に貢献したように、カルヴィニズムを強く信仰しており、父親 Edward は、女性は男性と議論するよりも、常に顔を隠して家に居なければならないという信念を妻に押し付けた。このように、カルヴィニズムに忠実で、女性観も保守的で、頑固な政治家である父親と、進歩的な考えがあってもそれを表現させてもらえない母親との間で、Emily Dickinson の宗教上の悩みはより深くなったようである。その結果、鬱状態になっていた彼女を自由な家風の Norcross 家に一時避難させたと思われる。

終わりに

このように、一般家庭とは異なり、東洋進出を狙う宣教師、貿易業者、政治家の共同体という特殊な環境で育ち、中国についての知識のあった思春期の詩人が、宗教復興運動の中で悩み、鬱状態になっていた時期に、たまたま Chinese Museum を見学し、そこで“self denial”によって困難を克服した人に出会ったわけである。Chinese Museum は Elizabeth Peabody の書店のほんの目と鼻の先にあつたので、その書店にも立ち寄ったかもしれない。それはともかく、Chinese Museum での体験は彼女の心に深く、強い印象として残ったに違いない。そのような影響はすぐには現れなくとも、後に隠遁という生き方や、彼女の詩の中に現れたのではないかと考える。

主な参考文献

Ackmann, Martha. “Biographical Studies of Dickinson.” *The Emily Dickinson Handbook*. Eds. Gudrun Grabber, Roland Hagenbüchle, and Cristanne Miller. Amherst: Univ. of Massachusetts Press, 1998, pp. 11-23.

Johnson, Thomas H. and Theodora Ward, eds. *The Letters of Emily Dickinson*. 3 vols. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1958. Citation by letter number.

Tanaka, Hiroyoshi Taiken. *Buddhism in Some American Poets: Dickinson, Williams, Stevens and Snyder: Buddha 英語文化 田中泰賢選集 4*. Nagoya: あるむ, 2017.

Tweed, Thomas A. *The American Encounter with Buddhism, 1844-1912*. Revised edition. Chapel Hill: The Univ. of North Carolina Press, 2000.

Uno, Hiroko. “Emily Dickinson’s Encounter with the East: Chinese Museum in Boston.” *The Emily Dickinson Journal* (the Emily Dickinson International Society), Vol 17, No. 1, 2008, pp. 43-67.

----. *Emily Dickinson Visits Boston*. Kyoto: Yamaguchi Publishing House, 1990.

The Chinese Repository

The Missionary Herald